



第25号 (2015/1/13)

広島県福山市木之庄町4-3-14
Tel&fax: 084-917-5937
e-mail: info@crcc-fukuyama.org



Community Renaissance Research Center



2015年、希望の年、おめでとつづいびます
代表理事 安川悦子

「コミュニティルネッサンス研究所がNPO法人として設立され、活動を始めてもう5年半になります。地域に足場を据え、地域にかかわる情報を集めて発信し、地域に暮らす「ひと」を結びつけ、地域にある「もの」を活用し、安心・安全なまちづくりに寄与する。こうした目的が、絵に描いた餅ではなく、少しずつ現実になりつつあることを実感しております。

二つの世界戦争と経済のグローバルな発展を経験してきた20世紀が終わり、21世紀になってもう15年になります。何十万人の人がたつた一つの爆弾で殺され、国家の名のもとに人が人を殺す経験を経験して私たちは、「ひと」と「ひと」が繋がりにくい、助けあうことの大切さを知りました。

いまこの「大切なこと」の意味が、「国家」や「経済成長」のかけ声のもとに再び変質しようとしています。

こうした状況の中で、「地域に足場を据えて地域に暮らす人たちが繋がりが合う場をつくる」という「コミュニティルネッサンス研究所の目標は、いままます重みを増しているように思えます。「ひと」が「ひと」と繋がりがいい、「ひと」として生きる喜びを実感する。これこそが「ひと」を殺し合う「戦争」を阻止する最大の武器になると思えるからです。

さあ！今年もこの研究所に集まって、「ひと」として生きる喜びを手に入れましょう。それがどんなに小さな喜びであっても、集めてみれば大きな力になります。

今年も、「コミュニティルネッサンス研究所が、「地域の絆」の一環として、地域の皆様と共に、生きる喜びをもとめる力となることを祈ります。



【都市農業を考える連続講座】

1月17日(土) 10時〜13時半

「野菜を食べていきいき 元氣」

講師：加納三千子(当会理事)

場所：ルネッサンス研究所集会室

参加費：500円

野菜を食べると自分の心や体がどのように喜ぶのか。そして、何故そうなるのか。近年明らかにされつつある腸内細菌達と共につくる免疫の仕組みなどの側面から考えてみませんか。昼食もご用意します。

1月31日(土) 14時〜16時

「わたしが取り組んだあれこれ」

講師：田村節子さん

場所：ルネッサンス研究所集会室

参加費：500円

田村さんは、『わかつちの会』を立ち上げて安全な食べ物の入手と、農家のサポートをしてこられました。最近ではホームレスの人の居場所として『金曜喫茶』を開かれています。

いずれもFaxまたはメールで申し込んでいただければ
あります。



**ヴァンダナ・シヴァの「いのちの種を
抱きしめて」のビデオを見る会**

2014年は国連の「家族農業年」でした。皆さん御存知でしたか？その2014年の年末、12月13日にヴァンダナ・シヴァの「いのちの種を抱きしめて」のビデオを見る会を行いました。

最初に概略を説明したあと5人でビデオを見ました。その後お茶を飲みながら、今の食べ物は何がどうなっているか分からなくて怖いね、という感想が出ていました。また、なぜ「種」なんだろうと思っていたが、ビデオを見てその大切さが分かった。地方の出身なのでコンプレックスのようなものを持っていたが、ヴァンダナ・シヴァは生まれた地方を大切に活動をしていることに感心した、という感想もありました。

このビデオは、エコノミストでフェミニストとしてアース・デモクラシーを訴えるヴァンダナ・シヴァのインドでの活動を紹介したものです。

Ⅰ ビデオ内容の概略

ヴァンダナ・シヴァは、1952年インド北部のウッタラカンド州デラドゥン市生まれ。カナダで物理学及び科学哲学博士号取得。大学での研究に従事後、「科学・技術・自然資源政策研究財団」とNPO「ナヴァダーニヤ(9つの種)」を設立した。1993年には、もう一つのノーベル賞と言われる「ラウト・ライブリーフード賞」他を受賞し、多くの著書が日本語に訳されている。

ヴァンダナ・シヴァはなぜ財団やNPOを設立して、「種の自由なしに、人間の自由はない」と活動をしているのか。このビデオは、その思いについて、辻信一さん(環境文化運動家。明治学院大学国際学部教員)の質問に答えるという形ですめられている。

ビデオはニューデリーのガンディー「塩の行進」像前の場面から始まり、列車でデラドゥンに向かい、ナヴァダーニヤ農場内の説明と農場内の「種の学校」内での講義、最後にニューデリーのオーガニックカフェ前で、アメリカ先住民の長老の言葉を引きながら、アース・デモクラシーへの思いを述べて終わっている。

**Ⅱ ヴァンダナ・シヴァの思想の
根底にあるもの**

1. インドの歴史をふまえて

(1) ガンディー主義

このビデオがガンディー「塩の行進」像前から始まるところに意味がある。彼女の母親もガンディー主義者であり、その影響を受けている。

彼女が6歳の頃、誕生日の贈り物としてナイロンの服をほしがった。それに対して母親は「ナイロンの服を買ってあげても良い。しかしコート代は大金持ちの高級車に化ける。しかし、あなたがこれまで通り手紡ぎ織りの服を着続けると、どこかの貧しい母親と子ども達のご飯になる。あとはあなた自身が決めなさい。」と。

マハトマ・ガンディーは「非暴力・不服従」による抵抗を「サティヤグラハ」運動と名付けて実践

していた。「塩の行進」とは、1930年にイギリス植民地政府が定めた「製塩禁止法」による塩の専売に反対し、約380キロメートルを塩を作りながら行進した抗議行動を像にしたものである。

(2) エコフェミニズムと「チプロ運動」

「チプロ運動」とは、ヴァンダナ・シヴァの故郷ドゥン渓谷で木材会社が森の木を切ろうとしたときに、大地を、水を守るために女性たちが木を抱きついて、伐採を阻止した森林保護運動である。環境運動と女性解放運動は切り離せない関係にあるという考え方をエコフェミニズムという。「鉱山のカナリア」のように森が、川が、土地が、種が消え、暮らしが脅かされる時、危機を察知するのは女性たちだという考え方。例えば、1962年にレーチエル・カーソンによって出版された『沈黙の春』もしかりである。

2. なぜ「種」なのか

(1) 「種子」はガンディーの「糸車」の現代版

表:「種子」はガンディーの「糸車」の現代版

ガンディーの「糸車」	ヴァンダナの「種子」
スワラージ: 自由と自治	ビージ・スワラージ: 種の自由
	アンナ・スワラージ: 食の自由
	プー・スワラージ: 大地の自由
	ジャル・スワラージ: 水の自由
スワデジ: 自給と地産地消	スワデジ: 産業に依存せず、 地元の市場を核とする経済
サティヤグラハ: 不正にNOという責任	サティヤグラハ: 権力の脅しや 暴力に屈せず、「私は従わない」と言うこと

種子は今を生きる人々のいのちを支えているだけでなく、未来の人々のいのちの基盤でもある。

現在の生物種の絶滅ペースが続けば、今世紀末までに全生物の3分の1が絶滅するとの予測もある。8万種と言われる食用植物のうち、現在栽培されているのはほんの150種、国際的に取引されているのはわずか8種である。

グローバル企業は遺伝子組み換え(GM)技術をしてこにして、生物の特許権を獲得し、知的所有権による種子の独占支配をすすめている。すなわち生物の多様性を破壊し、「種の自由(シード・フリーダム)」を奪い、人間の生存基盤そのものを支配する「バイオバイラシー(生命略奪)」である。

シード・フリーダム運動は生物が世代を超えていき続けることであり、5つの巨大企業の奴隷にならないための抵抗でもある。

サンスクリット語などでは種子は「ビジャ」といい、「いのちの源」という意味がある。

(2) 遺伝子組み換え作物とは

遺伝子組み換え作物(GMO)^(注1)とは、ある生物に他生物の遺伝子を入れるという、自然界にはあり得ない技術である。

その問題点として①誰もが自家採取していた種の特許を大企業が握り、GMO種になって種の値段は80倍になった。インドコットンの95%は遺伝子組み換えである。②種子に、抗生物質耐性とあわせて三つの毒性遺伝子が組み込まれてい

る。入れた遺伝子がどこへ行くかも、どうなるかも分からない。

目 ヴァンダナが目指すもの

〜アース・デモクラシー〜

1. 生物多様性を活かす農業

ナヴァダーニヤ農場は持続可能な農のあり方を世界に広める拠点としての役割を果たしてきた。

それは単一栽培を旨とする現代の主流農業とは対照的に、多種の農作物を混合栽培することで、多様性の実験場にもなっている。この農場運動には20万に及ぶ小農家が参画している。

2. 持続可能な経済を

(1) グローバリゼーションからローカルへ

① グローバリゼーションとは

ヴァンダナは、今や世界は国家による帝国主義支配から、国家を超える力を持つ大企業が支配する新自由主義グローバリゼーションの時代へと変貌を遂げた、と述べる。

現代のグローバリゼーションは、均一化した商品やサービスを供給する経済活動の自由を意味する。それは、気候変動、生物多様性の破壊、地域コミュニティの喪失、民主主義の形骸をもたらししている。

ローカリゼーションこそ世界の未来があり、いのちを中心とする持続可能な経済が成り立ちうる。

また、グローバリゼーションは民主主義を破壊する。NAFTA、米印2国間協定、TPP等の国際協定は全て市場の拡大と民主主義の縮小を意味している。

例えばTPPのISD条項では、企業の海外進出を保護するため、進出先の国の政策や規制によって企業が損害や不利益を被ったと判断される場合には注2、世界銀行傘下の国際投資紛争解決センターに提訴し、その国を訴えることができる。

グローバル化論の権威、サミュエル・ハンティントン氏(アメリカの国際政治学者)によれば、「人を憎むことによって自分が何者かを知るといふ。しかしこれは「聖戦」の論理である。

② 通商のグローバル化に伴って起きる変化

一つは政治的变化である。企業による支配がその利害に沿うものへと民主主義を変質させる、大企業のための国際化ともいえる。二つ目には地球を破壊するほどに環境が変化してきている。そのことは、生命基盤そのものが破壊されていることを意味する。

③ ローカリゼーションとは

近年、「共(コモンズ)」が経済至上主義と自然破壊に歯止めをかけ、持続可能な社会を取り戻すための有効な筋道として世界各地で評価され始めている。

ローカリゼーションとは、経済、民主主義、文化を蘇らせるための新しい道である。つまり多様な者たち間のつながりをしめすものである。

(3) ヴァンダナ・シヴァが目指す

アース・デモクラシー

① アース・デモクラシーとは

まず宇宙、地球、人類など巨大なものの一部として自分を意識することが大事。そして、環境負荷を小さくするために経済をローカルにしていくなことが大切である。

彼女はその著書『アース・デモクラシー』山本規雄訳、明石書店)の中で、「古くからある世界観であると同時に、新しく現れた政治運動でもあります。平和と公正、そして持続可能性を求める政治運動です。アース・デモクラシーは、特殊なものと普遍的なものを、多様なものと共通のものを、地域的(ローカル)なものとは地球規模(グローバル)なものをつなげます。…」と。

そして、アース・デモクラシーの原則として次の10箇条をあげている。

- a. あらゆる生物種、民族、文化はそれぞれ固有の価値を持つ。
- b. 大地の共同体は、あらゆる生命にとって民主的である。
- c. 自然及び文化における多様性が保護されなければならぬ。
- d. あらゆる生き物は、生命を持続させる権利を自然権として備えている。
- e. アース・デモクラシーは、生命中心の経済及び経済における民主主義に基礎を置く。
- f. 生命中心の経済は、ローカルな経済を基盤として構築される。

g. アース・デモクラシーは、生命中心の民主主義である。

h. アース・デモクラシーは、生命中心の文化に基礎を置く。

i. 生命中心の文化は、生命を育む。

j. アース・デモクラシーは、平和と配慮と共感をグローバル化する。

② 人類の窮地を脱するために

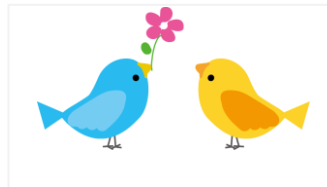
アメリカ先住民の長老の言葉として次のようなことが言い伝えられている。「人間が最後の木を切るとき、最後の川を汚すとき、最後の魚を食べるとき、人間はやつと気がつくだろう、お金は食べられないと言つことに」。この予言がますます現実味を帯びる今日、ヴァンダナ・シヴァの言葉をかみしめてみませんか。

注) 辻による補足説明

1. 緑の革命

第二次世界大戦後から、高収量品種や科学肥料の使用により穀物の収量増大をはかる農業改革のことを緑の革命という。

しかしその問題点も浮上してきた。①大量の水、化学肥料、農薬、大型機械、石油エネルギーを必要とすること。それにより、土壌汚染、灌漑設備建設による環境破壊、水利権の争い、砂漠化現象が起きている。



② F1品種が世界の種市場と農業を席巻し、毎年F1種を購入しなくてはならない。③ F1種、化学肥料、農薬、機械化が近代農業に必須条件になってきた。それにより、供給する企業と農民の間に経済的な支配関係が生じてきた。

2. 遺伝子組み換え作物

深刻化する食糧危機を救う「第二の緑の革命」としてもはやされている。1984年にGMタバコが開発され、1994年に日持ちの良いトマトが商品化。現在主に栽培されているGM作物はトウモロコシ、大豆、ナタネ、コッソンのほか、ジャガイモ、パイナップル、小麦、米は未承認で栽培が禁止されているが、2013年には遺伝子組み換え小麦が見つかった。日本でも、資料や加工食品の原料として大量に輸入されている。

最近では種子企業が農民に種を作らせないために自殺する種子を開発。さらには発芽や実りに関わる遺伝子を人工的にブロックして特定の抗生物質や農薬などのブロック解除剤を散布しない限り、それらの遺伝子が働かないようにする方法も開発。

その問題点として

① 安全性

厚生労働省は実質的同等性として安全性を強調。しかし農薬耐性作物に使用する農薬の安全性のほか、GM食物の安全性(催奇形性、発がん性など)が問題だとする研究も多い。

2009年5月、米国環境医学会は(一)免疫機能への

- (二)悪影響、(三)子孫が減少したり、ひ弱になる影響、(三)肝臓・腎臓など、解毒器官の損傷、等を指摘。

②種の知的所有権

知的所有権が認められた遺伝子組み換え作物の種子を使用する農家にはライセンスによって自家採取の禁止、特定の除草剤の使用が義務付けられている。ある農作物に遺伝子組み換え種子の遺伝子が交配などで紛れ込んだ場合でも、所有権侵害として企業が訴訟を起すことができる。

その典型的なものがシユマイザー事件である。これは、1988年にカナダ・モンサント社が、長年有機農法でナタネを栽培していたシユマイザーを「特許権侵害」として訴え、カナダ・モンサント社が勝訴したものが。日本でも、知らないうちに違法に輸入されていたババイヤを栽培していたことが発覚し、ほとんどのババイヤが伐採された。

③環境への脅威

除草剤に強い雑草がはびこり手に負えなくなつた、殺虫毒素の影響を受けない害虫がはびこる、これまで問題にならなかった昆虫の害虫化などの環境を汚染する問題が生じている。

注2) 加納による補足説明

WTO協定のSPS協定に参加することで日本の食品衛生法も改定された。例えば、海外の企業に不利益になるとして、製造年月日から賞味期限へと変更になった、畜肉への女性ホルモン残留は認められないから微量なら許されるに、残留農薬の種類や量も外国基準に合わせてと緩和された。



12月23日、「地域の絆」前の広場で餅つき大会が開かれました。杵で餅をつく人、丸める人、販売する人、と大勢で協力されていました。

地域の絆の利用者さんは、室内で、小物作り講座で作られた羊の置物やクチナシ染めハンカチを販売されました。



NPO スタッフや子どもたちも
お餅をついたり 丸めたり♪



利用者さんが売り子さんに♪



ルネッサンスのリサイクルバザーでは、衣服や本の他、手作り味噌やフェルトで作った剣なども販売し、好評でした。また、子ども向けに輪投げのゲームコーナーを作り、こちらも用意した景品20名分は全てなくなりました。ゲームは新しい試みでしたが、地域の子どもたちに楽しんでもらえたようです。当会関係12名のメンバーにご協力をいただき、売上げは約7千円でした。

最後に城北中学校生による太鼓の演技が披露され、迫力のあるステージを皆さん真剣に見ておられました。



入るかなあ?!



耐震委員会 始まりました

今年度の耐震診断等評価委員会が始まりました。今年度は例年になく申込が押して、年末の12月18日、19日と2日間にわたる朝9時から夕方までの委員会でした。評価委員の皆様本当にお疲れ様でした。年明け早々も1月15日、16日と評価委員会開催の予定です。またまたご苦労をおかけします。

耐震改修報告書の山を前にして、事務局も福山の耐震改修に少しは貢献しているのかなあ、と感じる今日この頃です。



編集後記



福山が生産量一位の「くわい」。これまでほとんど食べたことがなかったのですが、この冬は色々な料理にして、家族揃ってくわいが好きになりました。でも正直なところ、特別美味しい食べ物ではないのになんで美味しいと思うのか：福山産だから？

ん？なんか私、福山の人になってる！

昨年を振り返ると、こちらでお仕事を始めて、福山の企業や平和学習について知ることができ、地域の皆さんや学生さんと触れ合い、この地域への愛着が増した一年でした。

今年も福山の魅力を新たに発見していきたいと思えます。(原)

